

鳥取市六部山 1 号墳出土資料について

東方仁史¹

A study on artifacts of the Rokubuyama No.1 Tumulus, Tottori-shi, Tottori, Japan

Hitoshi HIGASHIKATA¹

はじめに

本稿で紹介する資料は、鳥取県立博物館が所蔵する「六部山 1 号墳」出土資料である。これまで、これらの資料については出土したという情報はあったものの、種類や形態については一部の写真が公表されたことがあるだけだった。また、一部の資料は同博物館の常設展示室で長らく展示されており、観覧者の目に触れる状態ではあった。しかし、所蔵者から借用していたもので館蔵資料ではなかったこともあり、特段の調査もなく展示されているだけであった。

筆者は以前同博物館に勤務しており、本資料を扱う立場にあった。また、六部山 1 号墳出土資料と一括の借用資料だった古郡家 1 号墳出土資料がともに同博物館に寄贈され、これを受けて保存処理・修復計画を立てて実行した経緯がある。しかし、3 箇年計画のうちの 2 箇年を担当した後異動したために、在職中に資料を公表することができなかった。古郡家 1 号墳出土資料はすでにその詳細が報告されており(高田・東方 2013)、本稿で六部山 1 号墳出土資料のすべてについて詳細を報告し、責を果たすものである。

1 古墳の概要と資料の由来

古墳の概要 六部山 1 号墳は鳥取市久末に所在する。千代川右岸の鳥取平野南部丘陵地帯は、その尾根上に多くの古墳が密集する地域である【図 1】。

六部山 1 号墳は直径 28.5m、墳丘高 4.5m の円墳とされる(古郡家 1 号墳調査団 1961)が、測量調査は行われたことはない。古墳は、北流する大路川の谷底平野から分かれた狭い谷底平野に面した低い丘陵の先端に位置する【図 2】。尾根の上方には直径 20m の 2 号

墳が存在する。また、谷を隔てた西側約 100m には鳥取平野右岸で最古の前方後円墳と考えられる六部山 3 号墳(63m、古墳時代前期中葉)が、北西約 600m には鳥取平野最大級の前方後円墳である古郡家 1 号墳(92m、古墳時代前期末)が築造される(高田・東方 2013)。このほか、農道建設や農地造成などでいくつかの古墳の調査が行われており、前期から後期まで連続と古墳が築造されていることが知られる¹⁾。

資料の由来 今回報告する「六部山 1 号墳出土資料」は箱式石棺から出土したとされる(古郡家 1 号墳調査団 1961)。しかしながら、ここでは箱式石棺から馬鐸、銜、轡、須恵器などが見つかったことが述べられているだけであり、出土日時や発見の状況についてはほとんど情報がない。県内でも珍しい金銅装馬具であったため、その後色々な文献に取り上げられたものの、記述内容はこれを踏襲したものである。資料はその後、山陰考古学研究所の所蔵となっていたが、いつからどのような経緯で所蔵に至ったのかははっきりしない。1978 年から、古郡家 1 号墳出土資料とともに鳥取県立博物館が借用しており、前述のとおり一部は常設展示室に展示されていた。さらに、詳細は不明ながら杏葉の一部は保存処理と修復が行われており、樹脂を用いて欠損部分の補填なども行われていた。この状態で掲載された写真が、資料が公表された数少ないものである(米子市史編纂協議会 1999)。

その後、山陰考古学研究所が解散したことに伴い、六部山 1 号墳出土資料は古郡家 1 号墳出土資料とともに平成 22 年度に鳥取県立博物館に一括して寄贈された。両古墳出土資料には保存処理が行われていないものが多かったほか、保存処理が行われていても劣化が

¹〒 680-1133 鳥取市源太 12 (公財)鳥取県教育文化財団
Tottori Foundation for Education and Culture, 12 Genta, Tottori City, Tottori, 680-1133, Japan
E-mail: higashikata-hi@pref.tottori.lg.jp
[受領 Received 30 November 2016 / 受理 Accepted 10 January 2017]

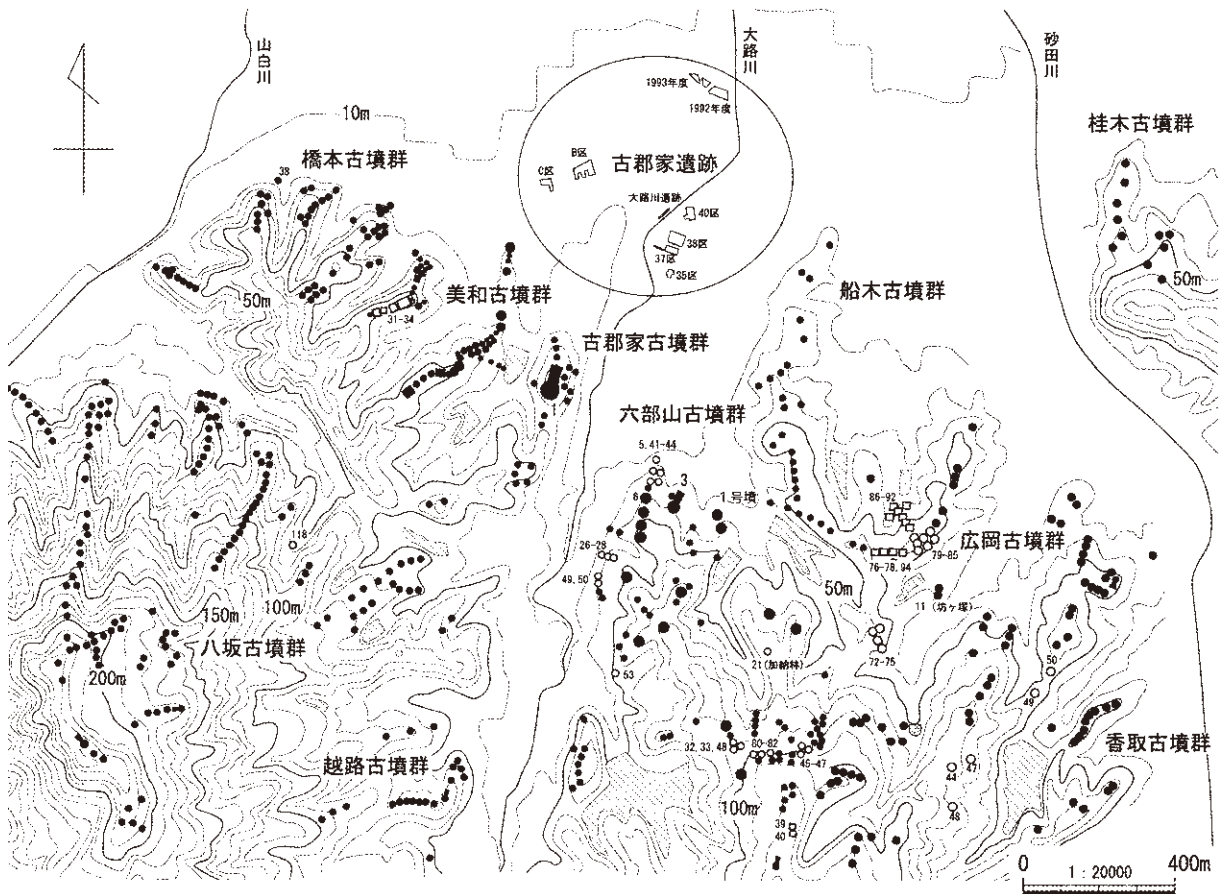


図1 周辺の遺跡（高田・東方 2013. 図8 を一部改変）

認められたもの、寄贈に伴う整理によって保存処理をした資料としていない破片が接合したものもあり、そのままでは保存と活用に支障をきたすことが判明した。そのため、平成24年度から3箇年かけて保存処理と修復を計画し、平成24・25年度は古郡家1号墳出土資料、平成26年度に六部山1号墳出土資料について行った。

古郡家1号墳出土資料については、前述のとおり新鳥取県史編さんに伴う再調査が行われ、すでに資料調査報告書が刊行されている（高田・東方 2013）。この調査は保存処理前に行われたものであるが、保存処理に伴って判明した事実も報告書に反映させている。また、保存処理および調査報告書の刊行が行われた結果、平成26年10月6日付けで、同古墳出土資料は一括して鳥取県保護文化財に指定された。

六部山1号墳出土資料もすでに一部の保存処理・修復が行われていたが、劣化が確認できなかった剣菱杏葉【図5-4】を除いた全点について、改めて保存処理と修復が行われた。調査および図化は保存処理が終了した平成27、28年度に行った。

2 出土資料の詳細

種類 六部山1号墳出土資料は、現状では馬具のみが存在している。須恵器、土師器も存在したらしい（古郡家1号墳調査団1961）が、寄贈された資料中には見当たらず現在の所在は不明である。

馬具は、青銅製馬鐸、鉄地金銅張f字形鏡板付轡、鉄地金銅張双葉剣菱杏葉、同異形双葉剣菱杏葉、鉄製剣菱杏葉、これらの吊金具のほか、辻金具、兵庫鎖と考えられる破片などが存在する。以下、種類ごとに記述する。

馬鐸 1点存在する【図3-1】。青銅製の铸造品である。これまで「金銅製」と記述されたこともあるが、観察の限り鍍金の痕跡は認められない。左右の下端と裏面の一部を欠損するほか、鈕上端や稜角の部分で表面が剥離した箇所が存在するが、全体の残存状況は比較的良好である。吊金具が伴うが、現状では分離している。

全体の形状は馬鐸に通有の形態であり、長い台形の下辺が半円形に内湾する形状である。上部には長方形の鈕が存在する。上辺（舞）幅4.4cm、残存最大幅7.5cm、残存全体高13.5cm、鐸身部高11.8cm、残存厚4.3cm、横断面はいわゆる「杏仁形」で、下部に行く



図2 六部山古墳群分布図（高田・東方 2013. 図 26 を一部改変）

に従いカーブが緩やかとなり厚い凸レンズ状になる。器厚は約 0.1cm であるが、下端は 0.2cm 程に肥厚するとともに外傾する面を持つ。鈕は残存高 1.7cm、同基部幅 2.8cm、同厚 0.6cm。上半は腐食によって表面が剥離している。鈕孔は 0.8×0.6 cm 程度のやや歪んだ円形を呈するが、現状では表面側を中心に吊金具の鉤部が錆着して小さな孔が残るのみである。裏面側では鈕孔の下端部が舞にかけて斜めに傾斜する面を持つ。舞は表裏面へかけてやや傾斜しており、表面側には 0.7×0.5 cm の長方形の孔が存在する。

表面は、幅 0.05 ~ 0.1cm、突出高 0.05cm 程度、断面蒲鋒形の直線 2 本の間、基部径 0.25 ~ 0.3cm、突出高 0.2cm 程度、円錐形の珠文を列状に配した文様帯で上下と左右を区画し、内側を中央と縦方向 3 本の文様帯によって 8 区画に分割する。文様帯の縦横それぞれ中央のものが交差する場所に位置する珠文は他のものに比べて大型で、直径 0.7cm、突出高 0.1cm の円形の座を持つ。また、下辺の文様帯内の珠文でも周囲が半円形にわずかに盛り上がるものがあり、型押しによって文様を刻んだ痕跡と考えられる。文様帯に区画された内部は無文であり、仕上げに表面を工具で削った痕跡が残る。また、この際に文様帯の直線部分も削ら

れており、鑄造時の蒲鋒形の断面から台形状の断面に変わっている部分がある。また、鐸身左右両辺は研磨して仕上げしており、幅 0.3cm 程度の面をもつ。

裏面は無文であり、中央部分は平滑だが、左右は斜め方向の粗い線状痕が多数認められる。仕上げの際の研磨痕であろう。内面は研磨などは行われず、鑄造時の鑄肌を残す。

吊金具【図 3-2】は鉄製である。上端を欠損するが、幅 2.2cm、残存長 1.7cm の本体の下に鉤部が残存する。本体は中央部がやや盛り上がる。2 個の鉤が残っており、頭部径 0.5cm で脚は裏側に 0.8cm 程突出する。裏側に有機質が付着する。鉤部は先端が破損しているほか、錆でやや不明瞭であるが断面楕円形を呈す。

轡 1 点確認できる【図 4】。鉄地金銅張 f 字形鏡板付轡である。鏡板や銜、引手など各部分の破片は揃うものの、残存状況はあまりよくない。

鏡板は左側 (1) が半分程度、右側 (2,3) が 4 分の 1 程度残るのみである。左側の鏡板は裏面に銜端環と引手が錆着するほか、立間部には吊金具も錆着する。残存長 10.0cm、全高 8.0cm、挟り高 2.1cm、幅は挟りが最も深い部分から右側で 4.9cm を計る。中央には銜端環を通して留める、幅 1.9cm、高 1.1cm の隅円長方形の孔が存在する。ここに端環を通し、両端で幅がやや広がった長さ 3.1cm、幅 0.6 ~ 0.9cm、厚さ 0.2cm の鉄棒を端環に通して鉤でとめている。銜留部は錆で膨らんでいるが、円形を呈しており、縁金との間をつなぐ橋状の部分は存在しないと見られる。この部分には、左右に 3 個ずつ鉤が存在する。

鏡板本体は厚さ 0.2cm の鉄地板に、金銅板を被せた縁金を重ねて鉤で留めている。縁金の端部を金銅板は巻いているが、地板までを覆うことはなく縁金の下に入り込む状況が観察できる。縁金は幅 0.9cm 程度であるが、内側の金銅板が膨らんでしまっており、段差は明確でない。また、破損している右側の鏡板 (2) では、地板の上に別に薄い鉄板が存在し、縁金と一体になっているように観察できる。薄い鉄板と一体になった縁金に一枚の金銅板を被せ、それを鉄地板に重ねて鉤留していると考えられる。その鉤は頭部径 0.5cm、高さ 0.2cm で頭部に銀板を被せる。中心間距離は 1.0 ~ 0.6cm とややばらつきがあるが、平均すると 0.8cm 程度となっている。銜留部の周囲にある鉤も同じく銀板

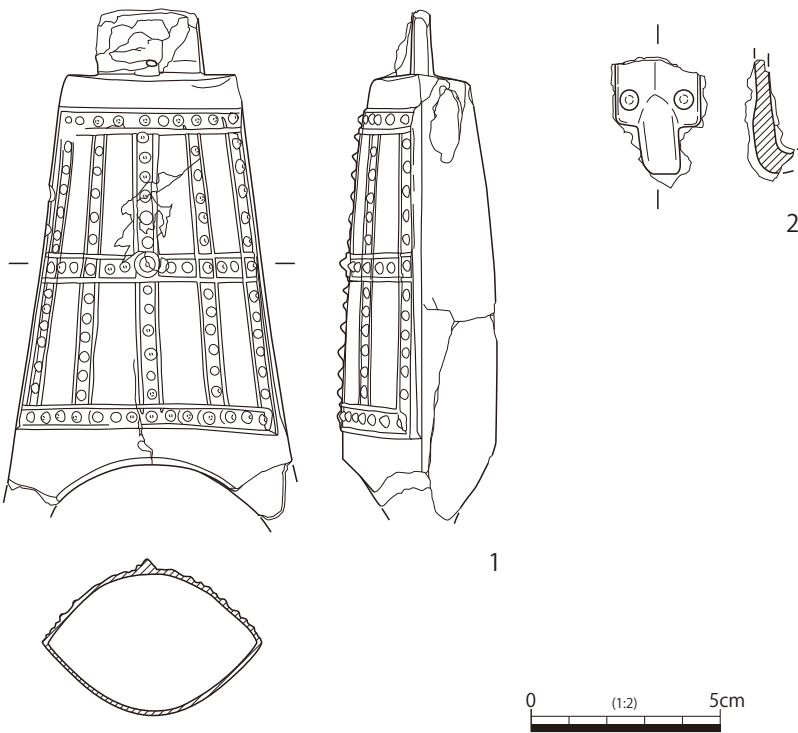


図3 六部山1号墳出土遺物実測図1(馬鐸)

を被せているが、銜端環に通した鉄棒を留める銜のみ銀板を被せていない。

立間部は幅2.8cm、高さ1.0cmで、上端から0.9cm下に横0.9cm、縦0.8cmの長方形の孔があり、吊金具が通される。吊金具は長方形の本体と鉤部からなるが、どちらも先端を欠損する。本体は残存長1.6cm、幅2.3cm、厚さ0.4cmで中央がやや山形に盛り上がる。表面には金銅板が被せられ、頭部に銀板を被せた銜が2個残っている。鉤部は幅0.9cm、厚さ0.5～0.3cm程度で断面長方形を呈する。吊金具はもう1点(4)存在するが、本体の上部や鉤部は欠損する。表面に銜が4個確認できる。

銜は端環部分のみが銹着する。銹ではっきりしない部分も多いが、幅1.8cm、長さ2.8cm程度でやや細長く角張った形態を呈する。銜棒状部の直径は0.8cm程度で断面は円形を呈する。この端環に鏡板の裏面側で引手が直接つながられる。引手は端部から長さ5.0cmまでが残存する。銜端環に接続する部分は、直径2.2cm程の円形を呈する。引手と反対側には合わせ目が認められ、先端を二股にして丸く整形し、銜端環に通して閉じているものと考えられる。環状部の断面はほぼ円形であるが、棒状部ではやや胴張りの正方形を呈する。直径は最大で0.9cmをはかる。

引手壺(5,6)は引手側が小さく手綱が接続する方が大きい、いわゆる壺形である。残りの良い5は、全長6.2cm、残存幅3.5cm(復元4.0cm)をはかる。引手側

には円形を呈する引手端部が銹着している。引手壺の環体は銹で不明瞭であるが、断面は角張っている。若干太さに差があり、隅円長方形もしくは正方形となるようである。引手壺は引手端部の環に直接接続する。

7は2本の鉄棒が組み合う破片で、図で上となるものは幅0.9cm、厚さ0.7cmで断面は隅丸長方形を呈する。残存長2.4cm。下のものは断面ほぼ円形、直径0.8cm程度の鉄棒を幅2.5cmの隅丸三角形に曲げる。図の下に続く部分は破損するが、左右が接する部分から30°程の角度で後方に折れ曲がる。残存長は3.2cmである。引手と引手壺の接続部と考えられるが、5とは造作が異なっている。8は長さ2.6cm、直径0.9cmの棒状鉄製品で、両端は破損する。銜棒状部の可能性が考えられる。

杏葉 4点が確認できる【図5-1～4】。1は、左右に「3」字形の形状を背中合わせに配し、下部には短小の菱形突出部が存在するもの

で、ひとまず「異形双葉剣菱杏葉」と呼称する。上部には方形の立間部があり、孔には吊金具が銹着する。比較的残りは良いが、右下位の突出部先端が欠損するほか、地板を中心に欠損部が存在し、樹脂が補填される。なお、これまでに公表された写真では、本資料の下位突出部から先端にかけては両辺が直線的である(米子市史編纂協議会編1999)が、整理により縁金部分の破片が接合した結果、実際には図のように屈曲があることがわかった。

全長17.2cm、幅は上位の突出部で12.1cm、下位で復元して13.8cm程度あったと考えられる。鉄製地板に金銅板を重ね、基部幅1.0～1.1cm、上面幅0.9cm程度、厚さ0.2cm程度の縁金を銜留めしている。縁金の表面には金銅板などは認められないことから、鉄製であったと考えられる。縁金で囲まれた内部には一体に作られた交差部が存在する。銜は頭部径0.6cm、突出高0.1～0.2cm程度で、X線写真と表面観察から銀板を被せていたようである。銜は比較的密に打たれており、中心間で0.7～0.8cmをはかる。

立間部は基部幅3.4cm、長2.1cmで、中央に孔が存在する。銹により孔の形状ははっきりしないが、楕円形を呈する可能性が考えられる。吊金具は完形で、表面に6個の銜が打たれた長方形の本体と、立間部の孔に通す鉤部からなる。本体は長さ2.3cm、最大幅1.6cm、鉤部は幅1.0cm、最大厚0.4cmほどで、断面は隅円長方形を呈する。鉤部先端は方形に形作られる。

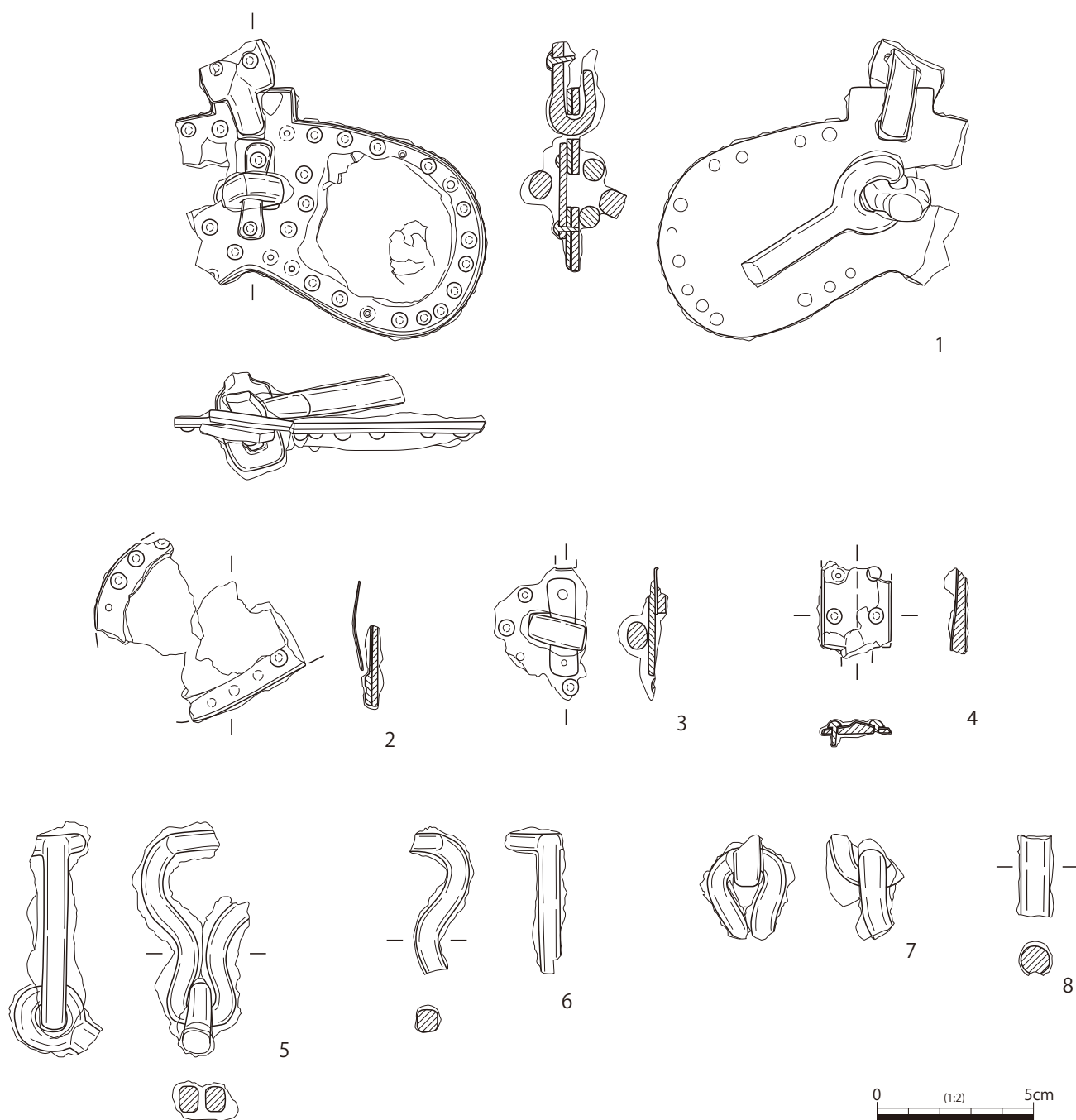


図4 六部山1号墳出土遺物実測図2(轡)

また、鉾脚は欠損する。

この資料は、左右に鉤状を呈する突出部を持つ点では双葉剣菱杏葉の範疇に入るが、上下に向かい合わせに双葉部があること、扁円部が存在しないことや縁金と一体で中央に交差部があることは異なる点である。

2は1と同形態、同構造の杏葉だが、法量や鉾数にわずかながら差異がある。最も大きな差異は鉾の数で、1に比べるとわずかに鉾頭の径が小さく、より密に打っている。下端から右下位突出部にかけてが残存し、残存長10.4cm、残存幅10.1cm、突出部長3.9cm、幅5.7cmで、1よりわずかに幅広である。鉾は頭部径

0.45～0.5cm、中心間で0.5～0.6cmとほぼ接するように打たれる。

3は鉄地金銅張の資料である。現状では菱形の1隅が欠損したような形状を呈する。以前は欠損部分に樹脂が補填されて四辺が緩やかにへこむ横長の菱形に復元されており、「飾金具」と考えられていた(米子市史編纂協議会1999)。しかしながら、後述するとおり、中央に存在する半球形突出部の周囲に施された二重線と列点による文様帯の形状が、突出部に沿った円形ではなく、破損部分の反対側1箇所が突出して心葉形を呈する。また、下辺に比べ、上2辺は内湾が少なく、

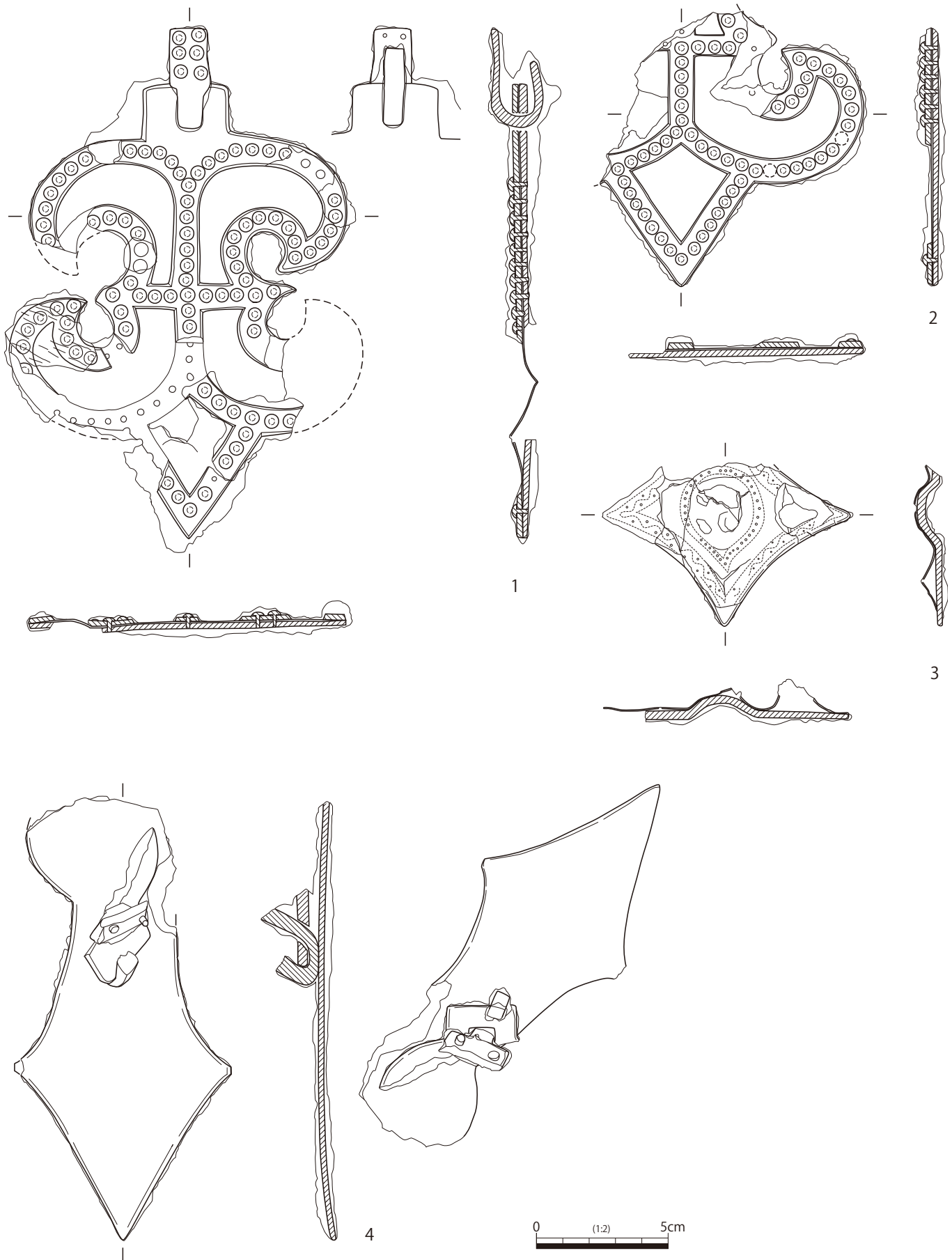


図5 六部山1号墳出土遺物実測図3(杏葉)

直線的になっているように見える。こうした形状は、単なる菱形を呈する金具とは考えにくく、上部にあった何らかの部位が欠損したと考えるのが妥当である。類例から「双葉剣菱杏葉」の可能性が高いと考えるため、以下その認識に基づき記述する。

本資料は、双葉部が欠損するほか、左側は鉄地板が欠損して金銅板のみとなっている。また、右と下に金銅板を大きく持ち上げる錆膨れが確認できるほか、先端や下辺に金銅板の欠損部分も多い。残存長 6.2cm、残存幅 9.5cm、中央の半球形突出部は直径 2.6cm、突出高 1.2cm をはかる。厚さ 0.25cm の鉄板の表面に厚 0.05cm 程度の金銅板を被せており、周縁では裏側へ折り曲げている。

金銅板の表面には、前述のとおり中央の半球形突出部の周囲に下端が突出する列点文、周縁に沿って波状列点文が施される。中央の列点文は、蹴り彫りによる二重線を 0.4cm 間隔で施し、間に直径 0.05～0.07cm の列点を施すものである。この蹴り彫りは上部から左右に向けて進められている状況が確認できる。下部の突出部は右側に若干ずれてゆがんでいる。周縁の波状列点文は、縁と平行に 0.4～0.5cm 間隔の二重線を、間に波線を蹴り彫りで施し、波線が二重線との間に形成する三角形状の部位に直径 0.05cm の点をなす。二重線と波線の蹴り彫りを施す方向は基本的に同一であるが、右下の 1 辺のみ波状文の方向が逆となっているのが確認できる。蹴り彫りのピッチはいずれも 10～12 個/cm であるが、周縁の方で若干ピッチが広い傾向が認められる。

4 は通有の形態の扁円剣菱杏葉である。この資料のみ再度の保存処理が行われておらず、錆に覆われた内部の様子は明らかでないが、表面観察の結果からは、もともと縁金や金銅板は存在しない鉄製杏葉であった可能性が高い。全体的に錆で覆われ、立間部全てと扁円部の 4 分の 1 程度を欠損するものの、全体的な残存は良好である。片面には立間部と吊金具の破片が錆着する。残存長 16.8cm、扁円部残存幅 5.7cm、剣菱部長 12.7cm、幅 8.3cm、厚 0.2cm をはかる。現状では図示した面の反対側に若干反っている。剣菱部の先端は尖っているが、左右の突出部の先端は尖らず幅 0.3cm ほどの台形を呈する。また、剣菱部両下辺は比較的直線的であるが、両上辺は突出部付近で強く湾曲する。

表面に錆着する立間部は、幅 2.7cm、長さ 1.2cm、立間部から続く部位は最大で幅 5.3cm が残存する。同じく錆着する吊金具は本体と鉤部からなり、上部を破損する本体は幅 2.4cm、残存長 1.0cm で、2 個の鉤が打たれる。鉤部は一辺 0.6cm の断面正方形で、先端を欠くが方形部からの長さ 2.0cm をはかる。この立間部は錆着している杏葉の可能性が考えられるが、やや厚いようにも見受けられる。

その他の馬具【図 6】 1 はもともと輪状を呈するものの半分程度が残存するものと考えられ、幅 1.0cm、厚さ 0.6cm で断面隅円長方形の鉄製品である。全体に有機質や錆が付着しており、本来の形状はあまり判然としない。なお、現状で 2 か所、幅 1.7cm 程度で带状の有機質が剥離したような痕跡が認められる。環状辻金具の環部の可能性が考えられる。

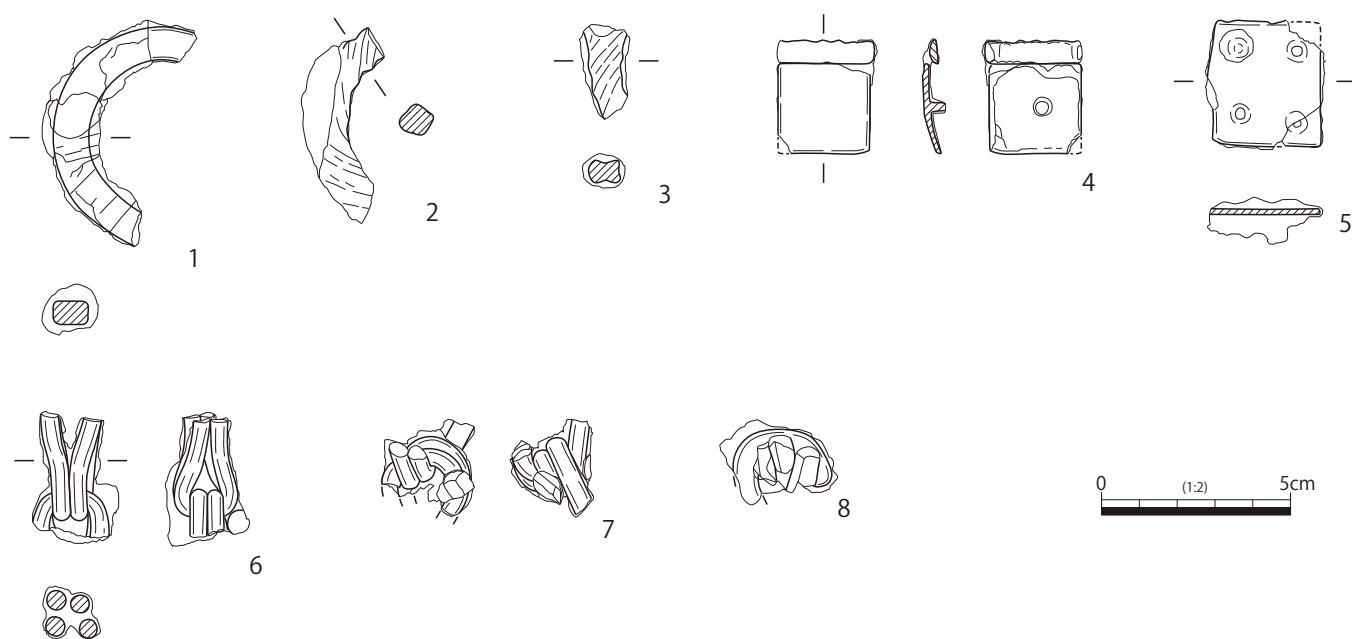


図 6 六部山1号墳出土遺物実測図4(その他馬具)

2は緩やかにカーブする残存長5.1cmの鉄製品で、錆に覆われ判然としないが振りを加えている。断面は正方形に近い形態で、1辺0.6cm程度である。3も同様に振りを加えた鉄製品で、長さ2.5cm、断面は幅0.8cm、厚さ0.6cm程度の長方形に近い形態をとる。若干カーブしており、2と3で同一品を構成する可能性がある。

4は一辺2.4cmの正方形の鉄製品で裏面に径0.2cm程の突出部が存在する。一辺には、X線写真での観察によれば綾杉状に刻みを施し、別の金属板を被せた幅0.6cm、厚さ0.2cm、断面蒲鉾状の金具が錆着する。おそらく貴金具と考えられる。本体の表面は平滑になっており、表面を覆っていた金銅板が剥離したものと考えられる。組合せ式板状辻金具の可能性が考えられる。

5は縦3.3cm、横3.0cm、厚さ0.15cmの板状の鉄製品である。4個の鉾が打たれ、裏面には鉾脚が残るが、2個は鉾頭が破損する。鉾頭、本体ともに別の金属装は認められない。なお、現状で左辺中央は破面となっているため、ここに何かが接続していた可能性もある。

6は兵庫鎖で、直径0.45cmの断面円形の鉄棒上下2本ずつが接続する部分の破片である。残存長3.4cm、残存幅2.1cm。別の部材が錆着する。7は残存長2.5cm、残存幅2.3cmで直径0.5cmの鉄棒2本ずつが接続する部分である。6と比べるとそれぞれの鉄棒が描くカーブが緩やかである。別の破片が錆着する。8は残存幅2.6cm、残存長2.2cmをはかる。左からカーブする部材は端部が残っているが、小さな破片が多く錆着しており、兵庫鎖ではない可能性もある。

3 考察

(1) 馬具の編年的位置づけ

六部山1号墳から出土した馬具のうち、全体の形態が判明し検討に耐えられるのは、轡、馬鐸、杏葉だけである。以下において、それぞれの位置づけを行う。

1 鉄地金銅張f字形鏡板付轡

本資料は完形ではないものの、編年の指標となる鏡板は半分以上残存し、銜端環や引手の接続部が残るなど、他の出土例と比較することが可能である。

本例は全形が分からないため、法量や形態を比較するのは難しいが、その他の特徴を検討する。まず、縁金に打たれた鉾は、頭部中心間で0.6～1.0cmとやや疎らであり、欠損部分を復元すると全体で40個程度になるうか。金銅板は一枚で地板と縁金を続けて覆う。引手は鏡板の内側で銜端環部分に直接接続する。引手壺はいわゆる壺形で、引手端に直接つなげられる。銜

端環は鏡板に開けられた孔に通され、端環に銜留の鉄棒を通し銜を固定する。この銜留部周囲には鉾が片側3個ずつ打たれており、円形の銜留部は縁金と橋状部分を介さず直接縁金につながる。

近年、同種の轡や杏葉等について精力的に検討を行っている田中由里の研究を参考とする(田中2004)と、本例は田中の分類でⅡA1式に該当する。ⅡA1式は、列島へ導入された当初からの形態を引き継ぐⅠ類と、定形化して大型化するⅡB1式への過渡期的形式と位置づけられ、Ⅰ類の要素も多く残るものである。その中でも、本例は疎らな鉾、銜留部の形状など、ⅠC1式の要素を強く持つ一方、引手の形態などⅡ式の技法が導入されたものである点がより重視できる。ⅡA1式が出土した古墳は、須恵器の陶邑編年(田辺1978)でTK47～MT15型式期に該当する。

2 馬鐸

青銅製鑄造馬鐸については、瀧瀬芳之の研究がある(瀧瀬1990)。馬鐸自体は形態が単純であり、編年の指標は下部の抉り込みの形態、鈕の形態、文様構成程度である。年代が下るにつれ、鐸身が大型化して下部の抉り込みが大きくなるとともに、鈕が円形から方形板状になる、文様が片面だけになる、などの変遷が指摘されている。六部山1号墳例は、このうちの八区無文系に分類できる。6世紀前葉に登場するとされており、各部の形態からもこの時期に比定できる。

ところで、鳥取県立博物館には、馬鐸がもう1点収蔵されている【図7】。本資料は六部山1号墳例より左右下端部の残りがよく、六部山1号墳例の形態復元を考える上で参考になる。全高15.4cm、最大幅8.2cm、上辺幅4.5cm、最大厚4.2cm、下縁は大きく弧状に抉り込まれる。上部には基部幅2.5cm、高さ1.5cmの方形鈕をもつ。鈕孔部分は吊金具脚部と思しき鉄製品が錆着し塞がっているが、本来は円形であったようである。正面側の文様は、六部山1号墳同様、珠文を中央に配した文様帯で区画した八区無文系である。文様を構成する珠文が直径0.2cm程度と六部山1号墳例よりわずかに小さく、文様帯の区画線も0.05cmとかなり細いという特徴がある。また、六部山1号墳例では文様帯の下縁が直線的であるのに対し、本資料は下縁の抉り込みに沿うようにカーブしている点も大きな差異である。表面は文様帯で区画された内部のみ工具で研削した痕跡が認められるが、六部山1号墳例のように文様帯や外縁部には研削が及ばない。全体として、六部山1号墳例よりも華奢で繊細な印象であるが、外形の線はかなり近似しており、断面のカーブではほぼ同形同大となる。

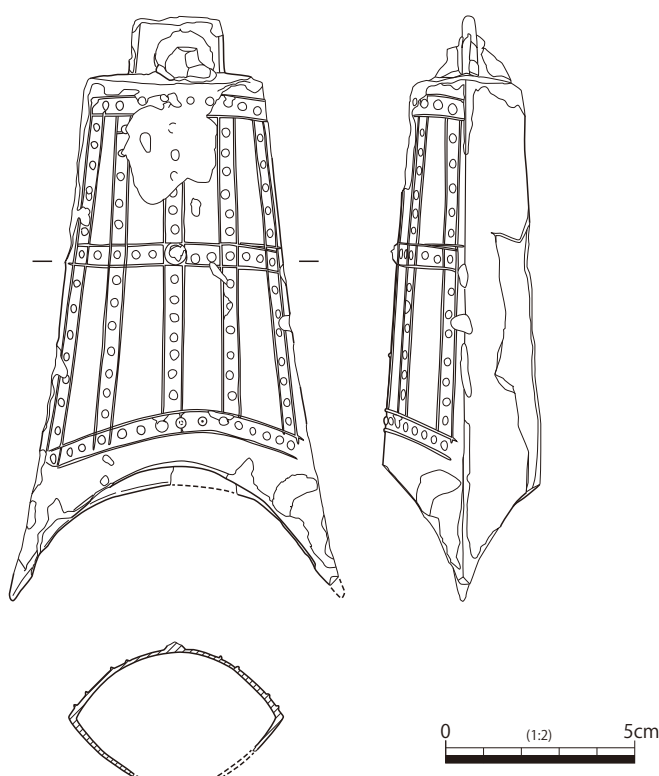


図7 鳥取市久末出土馬鐙実測図

本資料は「鳥取市久末出土」とされ(鳥取県立博物館 1973)、昭和45年に前身の鳥取県立科学博物館に個人から寄贈されたものである。「久末」は、六部山古墳群が所在する地域の大字名であり、出土した古墳は詳らかではないが、ほぼ同じ法量で同様の文様という点は注目される。同時にこの地にもたらされ古墳に副葬された可能性も考えられること、出土が想定できる古墳も今のところ知られていないことから、六部山1号墳から出土した資料の一部である可能性も考えておきたい。

3 杏葉

六部山1号墳からは鉄地金銅張双葉剣菱杏葉1点、鉄地金銅張異形剣菱杏葉2点が出土している。

まず、鉄地金銅張双葉剣菱杏葉【図5-3】は、全面に金銅板1枚を被せ、表面に蹴り彫り文様を施すものである。中央には半球形の突出部があり、周囲には列点文が施される。また、縁に沿って波状列点文が存在する。同様の形態、文様の杏葉として、奈良県野神古墳(千賀1977)、同芝塚2号墳(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2003)、鳥根県仏山古墳(後藤1941)、鳥根県立八雲立つ風土記の丘資料館1996)などがある。また、同じく半球形の突出部を持つものの波状列点文ではなく縁金を持つものとして、福井県大谷古墳(入江1986)が挙げられる。本例は双葉部を欠くものの、類例から下向き双葉部を有していたと考え

て差し支えない。時期は、類例が出土した古墳から、6世紀第1四半期という時期になるうか。

異形双葉剣菱杏葉は2点存在する【図5-1、2】。地板上に金銅板を重ねて縁金を鋳留めするもので、上下向かい合わせに突出部を持つ点が特色である。全く同じものはこれまで知られておらず、唯一群馬県恵下古墳例(後藤1941)のみ、左右に突出部を2箇所ずつ持つ点で類似するが、これは突出部が全て上向きである点で異なる²⁾。さらに、同古墳例は鉄地金銅張製であり、製作技法の点からはむしろ3との親縁性が高い。また、複数の双葉部を持つ双葉剣菱杏葉としては、扁円部両側に上下背中合わせの双葉部を持つ資料が存在する。大阪府梶原D-1墳(川端編1999)、福井県天徳寺丸山塚古墳(入江1986)などのほか、韓国固城松鶴洞古墳1A-1号遺構(桃崎2013)でも確認でき、6世紀前半～中頃を中心とする時期に位置づけられる。ただし、これらと本例は、法量および形態の面で大きく異なることから、系譜は異なっていると考えられる。また、静岡県翁山6号墳では、双葉部が左右3箇所ずつ存在し、下部に小型の剣菱状突出部を持つ異形の杏葉が出土している。六部山1号墳例とは、突出部の数や内部に交差部を持たない点などが異なるが、双葉部を一部向かい合わせに配する点にはデザインの共通性が認められる。

双葉剣菱杏葉については橋本英将の検討がある(橋本2005)。橋本は、「双葉剣菱」という形態の出現経緯として、単に通有の剣菱杏葉の系譜に連なるものではなく、デザインの発想自体は心葉形あるいは楕円形杏葉・鏡板の表面内側の文様、三葉文などから得られた可能性を指摘する。特に、双葉部が一組で上方もしくは下方を向くものは三葉文との関連は大きいことは想定される。本例もそうしたものの一つとして位置づけることが可能である。その場合、三葉文は馬具に限らないため、当時存在した三葉文を持つ器物いずれもがその元になったことは当然想定しうる。また、双葉剣菱杏葉には扁円部を持ち双葉部を取り除けば小型の剣菱杏葉として差し支えないものもあるので、剣菱杏葉からの一定の影響も存在することは間違いない。

また、本例は内部に縁金と一体になった交差部を持つ点も注目される。これは、楕円形十字文杏葉・鏡板との関連も考えられる。十字文杏葉・鏡板は6世紀初頭に新たに出現するものと考えられており、本例の時期の上限を考える手がかりとなる。

ところで、形態の異なる双葉剣菱杏葉が2種類出土した例は知られていない。通有の剣菱杏葉も出土しており、杏葉が3種類存在したことになる。双葉剣菱杏

葉と通有のもの2種類という例、あるいは同形態の双葉剣菱杏葉が複数出土した例(鳥根県仏山古墳)などはあるが、双葉剣菱杏葉が2種類存在する点は注目される。

(2) 六部山1号墳出土馬具の時期

六部山1号墳出土馬具の時期を先行研究に基づいてそれぞれ検討したところ、概ね6世紀前半頃に共通する時期があることがわかった。さらに、馬具のセット関係を検討した宮代栄一によれば、f字形鏡板付轡、剣菱杏葉がセットとなるのはTK208型式～TK43型式まで長期間にわたって存在する(宮代1993)が、環状もしくは板状組合せ式辻金具が伴うとすれば、TK47型式～TK10型式に時期を限定することが可能になる。

以上のことから、六部山1号墳出土の馬具は、古墳時代後期前葉の中でも早い段階、須恵器で陶邑編年(田辺1978)のMT15型式段階に位置づけることが可能である。種類としては、轡、馬鐸、杏葉、辻金具が存在する。それぞれ一種類ずつであり、一式がセットとしてもたらされ副葬されたと考えられる。鞍や鐙などを欠くものの、もとより不時発見による採集資料であり、その存在の有無を論じる意味はない。

4 六部山1号墳出土資料の位置づけ

(1) 六部山古墳群内における位置づけ

上記のように、六部山1号墳出土の馬具は古墳時代後期前葉、実年代でいえば6世紀前葉に位置づけられる。時期の特定に重要な手がかりになる須恵器や土師器の所在が不明であり、馬具の年代観が古墳築造の時期をそのまま表すものではない。しかし、馬具は一般的に伝世しない可能性が高く、特に本例のような装飾付馬具は特定地位の人物が入手、死亡時に副葬されたと考えられており、概ね古墳築造時期を反映しているとみて良いだろう。古墳築造の時期は後期前葉、6世紀前葉と考えられる。

六部山古墳群では現在90基を超える数の古墳が確認されている【図2】。前方後円墳は3号墳と93号墳のみでほとんどが円墳である。3号墳については大正時代からその存在が知られていた(鳥取県1924)ほか、珠文鏡が出土した21号墳(久保1989)、馬具が出土した本古墳などがその出土品によって知られていた。また、1980年代以降、農道建設や農地開発などに伴い13基がこれまでに発掘調査されている。

六部山古墳群は、大型前方後円墳である3号墳を中心に、やや大型の円墳が多く築造され、谷底平野に面した比較的低い丘陵上に展開する「西支群」と、丘陵

上位に位置し大型円墳が少なく小型の古墳が多い「東支群」に分けられることが指摘されている(高田・東方2013)。1号墳は、そのうち西支群に包含される。西支群は前期中頃の3号墳を嚆矢とし、前期末頃の6号墳、中期後葉の5号墳、26～28号墳、41～45号墳などが築造されている。後期のものとして内容が分かるのは、1号墳のみである。また、東支群では、前期末～中期初頭に21、45、46号墳などが築かれる。また、後期に位置づけられるものとして80、81号墳などがある。80号墳は古い段階の横穴式石室を埋葬施設とするもので、鳥取平野南部では現段階で最も古い時期に位置づけられる。6世紀後葉(TK43型式期)に築造されたものと考えられる。六部山古墳群において、1号墳と同時期に位置づけられる古墳は今のところ知られていない。西支群が比較的古い段階の古墳が多いのに対し、東支群は古い段階のものよりも新しいものが認められる。時期により造墓地を移した可能性が考えられるが、造営主体にも若干の違いがあったのかもしれない。

1号墳の直径28.5mという規模は、30mを超える6号墳に次ぐ規模であり、当古墳群のみならず鳥取平野の後期古墳としては大型の部類に属する。金銅装の馬具をセットとして副葬するなど、この六部山古墳群でもトップクラスの人物が埋葬されたのであろう。一方で、箱式石棺を中心埋葬施設としており、伝統的な葬法を継続して採用している点も注目される。

鳥取平野において、古墳時代前期から中期にかけて千代川左岸と右岸とに大型前方後円墳が築かれるが【図8】、6世紀前半になると千代川左岸の中でもやや川から離れた湖山池周辺に前方後円墳が継続して築造される。布勢古墳、大熊段古墳、琵琶隈古墳などがそれであるが、これらの古墳については埋葬施設や副葬品の詳細が知られておらず、正確な時期も明らかではない。現在は細い川で海とつながる湖山池は、古墳時代には直接海とつながっていた可能性が指摘されており(星見2000)、当時は天然の良港として機能していた可能性が考えられる。周辺の前方後円墳はこのような交易・交通の要衝を意識して築造されたと考えられる。こうした場所がヤマト政権から重視され、交易の場や交易自体を扼する勢力が奥津城を築いたと考えられる。湖山池周辺を根拠にする勢力が築いた古墳に比べれば、六部山1号墳の墳形や規模は劣ると言えよう。とはいえ、本古墳も、千代川右岸で鳥取平野から山を越えて国中平野(現八頭町)へ抜けるルート近傍に築かれる。このルートは、南下あるいは東南方へ向かい中国山地を越える複数のルートの起点ともなってい

る。古墳時代前期から後期まで、地域でも大型の古墳が築かれるこの地は、その嚆矢となる六部山3号墳の段階から重視されていたのであろう。

古墳時代の馬具は、金銅装で装飾に富むものが鉄製の簡素なものよりも上位に位置づけられる。六部山1号墳の被葬者は、前期の3号墳から連綿と続く首長の系譜に位置づけられる人物だった可能性が考えられる。鳥取平野の中心的勢力が、日本海を介した活動・物流の変化に伴い湖山池周辺に移ってからも、一定程度の勢力を保ち、政権とつながりを持っていたことが想定される。

(2) 鳥取県内のf字形鏡板付轡について

鳥取県内では管見の限り、50基以上の古墳から馬具が発見されている。そのほとんどは古墳時代後期後葉～終末期に位置づけられるものであり、素環鏡板付轡の存在が目立つ。六部山1号墳例と同種のf字形鏡板付轡は鳥取市倭文6号墳、米子市東宗像21号墳、倉吉市家ノ後口1号墳などで出土が知られる。

倭文6号墳例(山田編2004)は、直径15mの円墳の木棺直葬の埋葬施設の棺外に副葬されていたものである。縁金は別造りの銀板張で、表面に斜めに多数の

刻みをいれる。地板には金銅板を用いるほか、鉾頭にも金銅板を被せる。引手は鏡板の外側で連結されるものであり、壺形の引手壺と引手は兵庫鎖で繋がれる³⁾。田中の分類でI C1式に該当する。また、東宗像21号墳例(米子市文化財団2015)はやや小型であり、錆に覆われるため詳細は明らかではないが、疎らな鉾、鏡板外側で遊環を介してつながる引手など、やはりこれもI C1式と考えられる。これらの出土例は中期末葉、5世紀末～6世紀初頭に位置づけられ、六部山1号墳例よりも若干先行する時期となる。ただし、六部山1号墳例はII式の中では最も古い段階に位置づけられ、さほど製作に時期差はないものと考えられる。また、6世紀前葉に位置づけられる鉄製楕円形鏡板付轡の出土も、鳥取市開地谷23号墳、米子市百塚49号墳などで知られる。

これらは県内出土の馬具の中でも古い段階のものであり、5世紀末～6世紀前葉という時期から県内で馬具の副葬が開始したことになる。これらの古墳が前方後円墳ではなく円墳である点は大いに注目される。規模も、六部山1号墳が直径28.5mとされるほかは、20m程度と比較的小型である。前方後円墳からの出土ではない点、さほど大きくない古墳から見つかる点は、

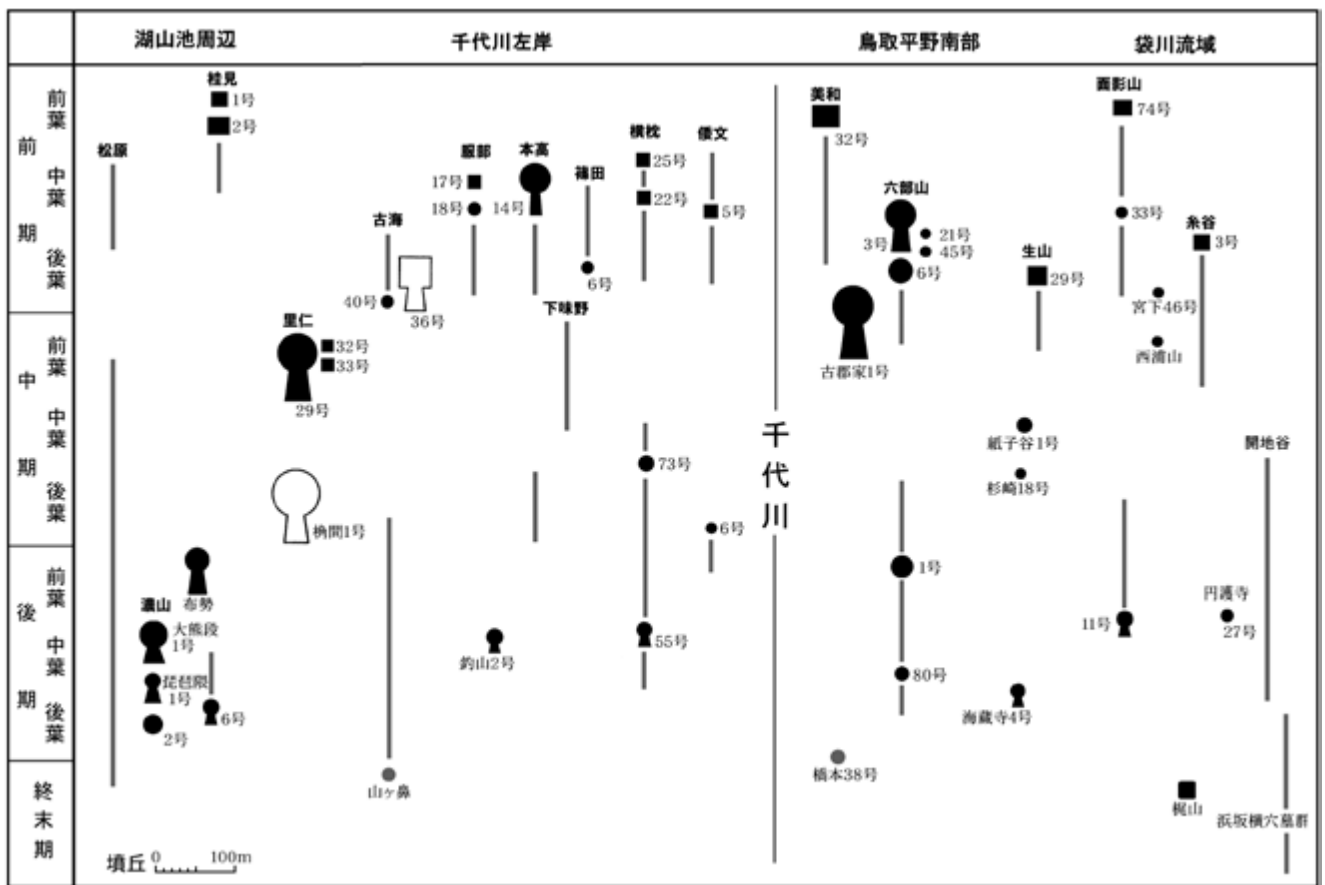


図8 鳥取平野の主要古墳編年

この時期の馬具を副葬する被葬者像を考える上で示唆的である。

おわりに

本稿では、古くに出土しながら実測図や詳細な観察の公表が行われたことがない鳥取市六部山1号墳出土馬具について検討した。これらの資料は、6世紀前葉に位置づけられる良好な資料であり、セットとしてもたらされたことが推定できた。また、2種類の双葉剣菱杏葉が出土している例は他になく、貴重な例となった。6世紀前葉には前方後円墳築造の中心は千代川左岸の湖山池周辺に移るが、前期～中期にかけて中心だった鳥取平野南部勢力も、この時期に一定程度の力を有していたのであろう。こうした鳥取平野における政治的動向を考える重要な資料・古墳として位置づけられよう。

ところで、現在鳥取県では『新鳥取県史』の編さんが進められており、考古資料についても資料編として今年度から3冊の刊行が予定されている。古墳時代編は平成31年の刊行予定で、近年の調査だけでなく過去に行われた調査の再整理・再実測等も行われている。鳥取県立博物館には古い調査で出土した資料が数多く所蔵されており、新県史に掲載される予定の資料も多い。一方、資料数が少ない、資料自体の存在が知られていないなどの理由で掲載に漏れたものも存在する。本稿はそうした資料の位置づけを行うものであり、今後も可能な限り資料の紹介を行っていきたい。

謝辞

本資料の調査では、鳥取県立博物館酒井雅代氏に多大な協力を得た。記して感謝申し上げます。

註

- 1) これまで20基程度が調査されているが、調査で新たに発見された古墳もあり、さらに多くの古墳が存在した可能性がある。
- 2) 本資料は本文中での記述のとおり、かつて行われた修復の際に下辺が直線的に樹脂で復元されていた。おそらく、欠損分を修復するにあたり、類例として恵下古墳の杏葉を参考にしたのであろう。
- 3) 報告書には詳細な記述や鮮明な写真は掲載されていないが、その後保存処理が行われ、本稿に既述したような状況が明らかになっている。なお、本資料の詳細に関する記述は、2012年に鳥取県立博物館で行われた展示における筆者の観察に基づくものである。

参考文献

- 入江文敏 1986 「若狭地方における首長墓の動態—主体部・副葬品の分析を通して—」『福井県史資料編13 考古—本文編—』 pp.340—363
- 内山敏行 2013 「馬具」『古墳時代の考古学第4巻 副葬品の形式と編年』 pp.125—135
- 小野山節 1990 「古墳時代の馬具」『日本馬具大観』第1巻古代上 pp.1—32
- 古郡家1号墳調査団 1961 「美和古墳群(5)」『ひすい』82 佐々木古代文化研究室
- 後藤守一 1941 「上古時代の杏葉について」『考古学評論』第四輯 日本文化の黎明 11—56
- 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館 1996 『黄金に魅せられた倭人たち』
- 高田健一・東方仁史 2013 『古郡家1号墳・六部山3号墳の研究』鳥取県
- 瀧瀬芳之 1990 「VI 馬鐸について」『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第94集 pp.181—200
- 田中由里 2004 「f字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』第51巻第2号 pp.97—117
- 千賀久 1977 「奈良市南京終町野神古墳出土の馬具」『古代学研究』第82号 pp.34—38
- 鳥取県 1924 『因伯二国に於ける古墳の調査』鳥取縣史蹟勝地調査報告 第2冊
- 鳥取県立博物館 1973 『考古資料目録』鳥取県立博物館資料目録 9
- 山田真宏編 2004 『鳥取市倭文所在城跡・倭文古墳群』(財)鳥取市文化財団
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2003 『古墳時代の馬との出会い—馬と馬具の考古学—』橿原考古学研究所特別展図録 第59冊
- 野田久男 1984 「第5編文化財 第一章考古学から見た日南」『日南町史 自然・文化』
- 橋本英将 2005 「2. 双葉剣菱形杏葉の検討」『大谷古墳』上中町文化財調査報告第10集 pp.34—37
- 星見清晴 2009 「湖山池—その生い立ち—」『鳥取地学会誌』第12号 pp.
- 宮代栄一 1986 「古墳時代雲珠・辻金具の分類と変遷」『日本古代文化研究』第3号 pp.33—45
- 宮代栄一 1993 「5・6世紀における馬具のセットについて」『九州考古学』第68号 pp.19-48
- 名神高速道路内遺跡調査会 1998 『梶原古墳群発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書 第4輯
- 桃崎祐輔 2013 「近年の韓国出土古墳時代馬具と日本列島の馬具の比較検討」『日韓交渉の考古学—古墳時代—』第1回共同研究会 pp.1—12
- 米子市史編纂協議会編 1999 『新修米子市史』第七巻 資料編考古 原始・古代・中世
- 米子市文化財団 2015 『観音寺狼谷山遺跡』一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書 7